

中野区立本町保育園における園庭環境改善の実践研究

A Practice Report about Utilization of the Garden Environment in Nakano Honchou Nursery School

佐藤 有香
SATO, Yuka

1. はじめに

現在、社会状況の変化や都市化が進む中、核家族化やシングル家庭の増加、地域との結びつきの希薄化など、子育てを取り巻く環境が大きく変化している。このような状況の中、子育て家庭の孤立や養育力の低下による子どもにかかわる問題や課題が複雑化している。さらに、子育てを行う親の高学歴化やインターネット、SNSの普及による情報化が進み、情報の正確性にかかわらず保護者の認識や知識が豊富になっている傾向がみられる。これらの変化を背景として、保護者や地域社会の幼稚園や保育所などに対するニーズが多様化し、同時に保育者の多岐にわたる資質や専門性の向上が求められている。

このような流れを受け、現在では幼稚園・保育所・認定こども園の教員・保育士などを対象とする研修の充実が図られるようになった。研修実施にあたっては、実践的な研修・外部講師の招聘、養成機関との連携及び研修機能の強化など様々な取り組みが行われている。幼稚園・保育所・認定こども園の現場職員のみではなく、多様な立場の専門家との連携は、保育者の資質向上に大きな意義があると考えられている。

また、保育者の養成機関においては、幼稚園・保育所・認定こども園など、実践の場や保育者と連携を図ることで、養成機関の教育研究資源の有効活用、教育研究水準の向上、教育活動の質保証がなされ、地域と共に人材育成の促進が図れるなど相乗的な成果が期待されている。

本学(こども教育宝仙大学)においても、子どもを取り巻く問題や課題に対し、地域の専門機関との連携を図り公開講座、合同調査研究、研修など様々な取り組みを行っている。本稿では、本学と東京都中野区との地域連携事業の一環として行われている保育実践研究の取り組みである「中野区立本町保育園における園庭環境改善の実践研究」について報告し、今後の課題と展望を明らかにすることを目的とする。

2. 本学と東京都中野区との連携事業について

本学と中野区との地域連携は、本学の開学時の『こども教育宝仙大学設置の趣旨等を記載した書類』において「幼児教育・保育の専門家による幼児教育の充実や保育関連施設の拡充だけでは十分に実現できるものではなく、地域における各種サービスや家庭での教育等を通じた幼児の生活全体の見直しや大人と子どもの関係づくりが必要である」との考えから、“地元”である東京都中野区をはじめとする地域社会との連携を強化し、充実・拡充を図ってきた。とりわけ、保育者養成機関である本学の地域連携は、幼稚園・保育園などで行われる幼児教育・保育と地域において提供される多様な子育てサービスを相互に連携させ、総合的にそれらの質の向上を図ることを基本とし、教職員・学生による地域密着型の社会貢献を目指している¹⁾。

具体的な連携事業の内容は以下の通りである。

(1) 東京都中野区健康福祉部との連携

- ① 学習スポーツ分野：生涯学習との連携：一般区民対象の公開講座
- ② 健康促進担当

(2) 東京都中野区子ども教育部・教育委員会との連携

- ① 中央図書館：図書館関係：おはなし会等への実習生の受け入れ
- ② 学校教育分野：区立幼稚園との連携
- ③ 学校教育分野：特別支援教育
- ④ 保育園・幼稚園分野幼児研究センター：合同研究への講師派遣
- ⑤ 保育園・幼稚園分野幼児研究センター：幼児研究センターとの合同調査研究
- ⑥ 保育園・幼稚園分野保育指導担当：保育アドバイザー
- ⑦ 保育園・幼稚園分野保育指導担当：保育指導

(3) 東京都中野区地域支えあい推進室

- ① 中部すこやか福祉センター地域ケア分野：中部すこやか福祉センターにおけるネットワークについて

現在まで、本学では子どもを取り巻く様々な問題や課題と共に、地域における子育て支援に対する取り組みを上記の通り実施してきた。その中で、中野区の幼児教育の質の向上を図る為に行われる保育実践研究は、本学教員による「保育指導」や保育園での実践への指導・助言、幼児教育センターとの合同調査研究など活発に取り組みがなされ、多くの成果をあげている。

3. 中野区立本町保育園における実践研究の取り組み

本学と中野区との地域連携事業の一環である「中野区子ども教育部保育園・幼稚園分野実務研修」は、中野区内の公立保育園の保育士が園内で保育実践に関するテーマを設定し、そのテーマについて2年間実践研究に取り組み、最終的には中野区内の幼稚園・保育園の保育者を対象にその成果を共有すべく発表を行っていくものである。筆者は、平成25年度～26年度にかけ中野区立本町保育園の実践研究に携わり、テーマ設定、研究方法、検証などについて1～2ヶ月に1度保育園を訪れ助言を行ってきた。本町保育園の概要ならびに、園庭環境の改善に向けた実践での取り組みは、以下の通りである。

■本町保育園の概要

保育目標

- ・健康な子ども
- ・思いやりのある子ども
- ・意欲的に遊べる子ども

保育方針

- ・一人ひとりの子どもが安全な環境のもと、心身ともに健康でその子らしさを発揮しながら、さまざまな経験や体験を通して生きる喜びと力を育んでいく。
- ・自分の気持ちを受け止めてもらったり、相手の気持ちを受け入れたり、いろいろな経験や体験から感じる心を育み、思いやりの心を育てていく。
- ・じっくりと遊べる環境を用意し、自ら考え工夫しながら遊ぶことが、満足感、自信へとつながるように援助していく。
- ・「伝え合い」を大切に、保護者とのよりよい関係を築きながら、相互理解を深め、子育てのパートナーとして、適切に支援していく。
- ・地域の子育て家庭への育児相談や援助、交流の場の提供を行い、地域で子どもを育てる環境作りに努めてい

く。

入園対象……生後57日より
基本保育時間……午前7時15分～午後6時15分
延長保育……午後6時15分～午後7時15分
休園日……日曜、祝日、年末年始
常勤職員数……園長1人、保育士25人、看護師1人、用務員1人、栄養士1人。調理は民間業者に委託。
延床面積……952平方メートル
園庭面積……192平方メートル
認可定員……113名
園の特徴……玄関や廊下は広く、誰にでもやさしい空間になっている。幼児室は、活動によりオープンスペースになり、全体が木の温もり、温かみのある、明るく広い保育室である。行事やクッキング保育を通して、食育に配慮した保育を計画的に展開していく。大きな子が小さな子と遊んだり、お世話をしたり、かかわりを持つ、異年齢交流を大切にしている。

■平成25年度の実践研究の取り組み

- ① 大枠のテーマ設定「園庭の環境改善」
- ② テーマに沿った、物的園庭環境の見直し
 - ・畑づくり
 - ・グリーンカーテンづくり
 - ・プランターでの野菜づくり
 - ・園庭の倉庫移動、シロツメクサの栽培
- ③ 子どもの遊び主体のテーマへ見直し
 - ・物的環境改善から子どもの遊びの検証による改善
- ④ 園庭で子どもがワクワクしている事柄の検証
 - ・「ワクワクポイント」についての定義づくり
- ⑤ 園庭での事例収集
 - ・園庭全体を6つのゾーンに分け、事例収集
- ⑥ レーダーチャートを利用しての事例検討
 - ・6つの「ワクワクポイント」の定義を使用して、子どもの遊びの事例検討

■平成26年度の実践研究の取り組み

- ① 園庭環境、遊びの充実に向けた取り組み
 - ・事例検討を元に遊びの充実に向け、物的環境や保育士のかかわりについて検討
- ② 保育士の子どもへのかかわりや環境設定の検討
 - ・保育士の専門性として、子どもへのかかわりをチャートの数値より検討
- ③ 実践発表の準備、実施

4. 平成 25 年度の 実践研究の経過

■研究テーマ設定の背景

中野区立本町保育園は中野区の中部に位置し、青梅街道より1本入った場所にあり、新宿にも近く、周囲はオフィスビルやマンションの多い地域にある。平成8年に建て替えられた園舎は、オープンスペースを活かしたバリアフリーで、廊下も階段も広く余裕を持ったつくりである。一方、園庭は面積が192平方メートルで、園庭でドッジボールをすると外野にいったボールが壁に当たり、内野に戻ってくる。夏期はプールを設置すると外遊びは勿論、登降園時の通路の確保も困難な状況であった。さらに、園庭には固定遊具（汽車のジャングルジム、鉄棒、滑り台など）が多く、自由に走り回れるスペースが少なかった。このような園庭環境に対し、保育士は常日頃から「狭く使いにくい園庭」という意識があり、子ども達が様々な経験をする上で困難さを感じ、どうにか改善していくことができないかと考えていた。そこで、「使いにくい園庭をどのように利用したら有効活用できるか」という園庭環境の改善に焦点を当てた実践研究のテーマを選択した。

■テーマ設定後の実践での取り組みについて

まず、現状の園庭環境の有効活用に向け、目の前の園庭が使いにくい園庭だとすると理想の園庭とはどのようなものか職員間で話し合いを行った。その結果、4点の理想のポイントがあげられた。1点目は＜畑・虫＞で、虫や畑での栽培などの経験により生命についての経験をすることというものがあげられた。2点目は＜草花＞で、自由にとれる草花により四季を感じ、植物に触れることを経験することである。3点目が＜広場＞である。これは広いスペースで思い切り身体を動かすことを理想としている。最後4点目は＜池・築山＞で、自然の中の遊びで身体や精神的な育ちにつながることを期待したものである。以上のような理想の園庭を目指し、保育士は限られた園庭環境の中で、最初の取り組みとして次のような改善を実施した。

① 夏野菜、稲のプランター栽培

子どもが様々な植物や生物に興味を持ってもらいたいという思いから、夏野菜や稲をプランターに植える活動を行った。プランターの配置もただ並べるのではなく、子どもが植物に寄ってくる虫や野菜の成長がみられるようプランターを小道のように配置し、その間を歩けるようにするなどの工夫を行った（写真1）。

② 園舎裏の畑づくり

畑づくりも、子どもが植物や野菜を栽培することに親しみを持ってほしいという思いからの活動である。園舎

西側には、通常は施錠されている隣接する公園との境界に大人が一人通れる位の幅の通路があった。その通路部分を整地し土壌を整え、5歳児の子どもと共に、トマト、きゅうり、とうもろこしを栽培した。子どもや保護者が自由に野菜の成長が観察できるよう、畑の中を通行可能にした（写真2）。

③ 園庭の倉庫移動、シロツメクサの栽培

子どもが季節ごとに自由に草花を摘み遊べるようにという思いで、園庭東側の倉庫を移動し、空いたスペースにシロツメクサの種を植えた。1メートル四方に芝生のような緑色の芽が出た状態になった頃、2歳児が嬉しそうにそのスペースに入り、芽の上で遊ぶと一瞬にして芽が踏み潰されてしまった。その後土壌を調べたところ、栽培をした場所はシダ類しか成長しない土壌であることが分かった（写真3）。

④ 他園の広い園庭に遊びに行く

これは、保育士の考える理想の園庭の3点目である広いスペースで思い切り身体を動かすことを目的に、本町保育園近隣の幼稚園、保育園の協力のもと他園の園庭で遊ぶ経験をした。保育士は、子ども達が広い園庭で思い切り遊び回ると予測をしていたのだが、実際の子供達は広い園庭の隅でのみ遊んでいた（写真4）。

以上のようにテーマ設定後、保育士は子ども達にとって理想の園庭とはどのように環境を整えれば良いかという発想から様々な取り組みを実施した。しかし、実際の子供達の姿をみると楽しんでいる姿もみられたが、必ずしも保育士の思いや意図の通りではない姿もみられた。他園の園庭遊びでは、広いスペースがあればのびのび身体を動かして遊べるだろうという保育士の思いから計画したが、実際の子供達は園庭の隅で楽しそうに遊び、予想とは異なる姿だった。これまでの取り組みでは、いわゆる園庭の物的環境の改善に焦点をあて、様々な活動や取り組みを行ってきたが、実際の子供の姿は保育士の予測とは異なる点も出てきた。保育士からすると狭く使いにくい園庭であっても、実際の子供達は園庭で日々楽しく遊べているのではないかという考えに至り、改めて、本町保育園の子供達が自分達の園庭でどのような事を楽しんでいるのか、面白がっている場所はどこなのか再度検証していくことにした。

■楽しんでいる事柄の検証、ワクワクポイント作成

まず、園庭の全体図を用意し、全職員に園庭内のどこで子ども達がワクワク楽しんでいるのか1枚のポストイットに1つの子供の遊んでいる姿を書き出し、検討を行った（写真5）。その結果、滑り台、砂場、ジャングルジム、虫ポイントの4つのゾーンで多くの子ども達が楽

表1 ワクワクポイント

ワクワクポイント	定義
ドキドキワクワク (気持ちが高まるワクワク)	・怖さ、スリル、どうなるかななどを味わえるようなワクワク。予測不能な感覚。 ・出来るかな、緊張感などのワクワク。
やったーワクワク (出来ない事ができたワクワク)	・達成感、努力の結果、目的に向かって達成できた時のワクワク。
大好きワクワク (大好きなワクワク)	・時間を忘れて取り組んでいる際のワクワク。 ・夢中になっている時のワクワク。
一緒にワクワク (一人では感じられないワクワク)	・複数の人とイメージを共有したり、共感したりする際のワクワク。 ・嬉しい時に一緒に嬉しいと言える仲間がいる時のワクワク。
そーっとワクワク (細心の注意が必要なワクワク)	・慎重に、大切に、静かに扱う際のワクワク。
みつけたワクワク (発見の喜びがあるワクワク)	・偶然の発見や、探していた物を発見したワクワク。

しんでいる事が明らかになった。次に、それぞれのゾーンで子ども達がどのような遊びを楽しんでいるのか全職員から事例を集め、職員間で話し合いを行った。すると、虫探しや木登り、みかん取りに夢中になっている子どもや、昨日は登れなかったジャングルジムの3段目にドキドキしている子ども、狭い空間にあえて入り込んで友だちとくっついてワクワクしている子どもなど、それぞれのゾーンで子ども達が楽しむ姿は様々であった。これらの事例の検討を進めていく中で、子ども達がそれぞれの楽しんでいる事柄と言っても、ワクワク・ドキドキしている内容は異なるのではないかという疑問が出てきた。そこで、これまでに集めた事例を再度検討し、子ども達がワクワク・ドキドキしている内容を「こっそりワクワク、できるかなワクワク、不思議だなワクワク、発見ワクワク、びっくりワクワク、挑戦ワクワク」など列挙していくと、全48種類の「ワクワクポイント」があげられた。そこから類似する内容や表現を整理し、予測不能な事柄にスリルや怖さを味わうような気持ちの高まりに対しては「ドキドキワクワク」、努力の結果や目的に向かって達成できた時のワクワクに対しては「やったーワクワク」など、最終的には上記にあげた6つの「ワクワクポイント」に分類された(表1)。

■6つの「ワクワクポイント」を使用する事例検討

次に、子ども達が遊んでいる姿を検証、考察していく際に、同一場面を複数の保育士が客観的に検討できるよう、上記で分類された6つの「ワクワクポイント」をレーダーチャートに示し検討を行うこととした(図1)。レーダーチャートとは、隣り合うプロット(点)を直線で繋げて、全体のバランスをみたり、複数の項目の大きさを視覚的に比較することのできるグラフである。

園内研修の際に、このレーダーチャートを使用し全職

員で事例の検討を行った。まず、数名のグループに分かれ、全てのグループで同一の事例を使用して、6つの「ワクワクポイント」(表1参照)を数値化しレーダーチャートを作成した。グループ内で事例の子どもの姿から「この場面では、一人で夢中になってダンゴ虫を探しているから、大好きワクワクポイントは5かな」とそれぞれのワクワクポイントについて検討を行った。実際にチャートを作成した保育士の感想は、「チャートを作ることで、子ども達が何にワクワクしているのか、どうして楽しいのかなど、具体的に探ることが出来る点は良かった」、「同じ事例を検討しているのに、考え方、感じ方が色々だということが分かった」という意見がみられた。しかし一方で、「事例からただ子どものワクワクがどの位だったか数値化してチャートを作成してもあまり意味がないのではないか」、「保育士のかかわりによってチャートの数値が変化するのはないか」という意見も聞かれた。

そこで、再度レーダーチャートの活用の仕方について検討を行った。上記のレーダーチャートで取り上げた事例は、保育士が様々な物的、人的なかわりを行った上での子どもの姿を検討したものである。保育士の実践における子どもとのかかわりは、子どもがより充実した活動や主体的な遊びが展開できるよう、見守る、声を掛けるなどの様々なかわりや玩具や遊具の物的環境の整備を行っている。事例として取り上げた子どもの姿は、保育士としてのかかわりや、物的環境の設定があった上での子どもの姿を検討しているので、保育士のかかわりや環境設定、配慮などチャート作成時には考慮していく必要があるのではないかという意見が出てきた。

そこで、チャート作成の際は、1つの事例に対し2種類のチャートを作成することとした。1つ目のチャートは、保育士がかかわる前の子どもの姿をプロットしたものである。2つ目は、保育士が何らかのかかわりや援助を行

った後の子どもの姿をプロットし、チャートを作成することにした。この2つのチャートを比較することで、保育士のかかわりや物的環境の設定により子どもの姿がどのように変化したか視覚的な検討が可能になると考えたからである。

例えば、1歳児の女児が初めて園舎裏の細い回遊路を発見し、ドキドキしながら独りで一周して戻ってきて、その後、友だちや保育士を誘って繰り返し遊ぶという事例があった。この場面での保育士のかかわりは、一連の行動をそっと見守るという選択であった。この事例では、初めに女児が独りで回遊路を見つけ、恐る恐る一周する姿を1つ目のチャートとして作成した。その後、2つ目のチャートは保育士の「見守る」というかかわりにより女児の「ワクワクポイント」がどのように変化したかチャートの作成を行った。この事例では保育士は「見守る」というかかわりを選択したが、これが「何を見つけたの？」と声を掛け、保育士と一緒に回遊路を一周するというかかわりの選択をすれば、またチャートの形は違ってくることになる。この2つのチャートを比較することで、保育士が「見守る」という援助の選択が、それぞれの「ワクワクポイント」の変化にどのような影響があったか検討することが可能になった。さらに、チャートの各ポイントを高くするためには、保育士がどのようなかかわりや環境設定を行う必要があるか検討する際にもこの2つのチャートを比較することにより可能になった。

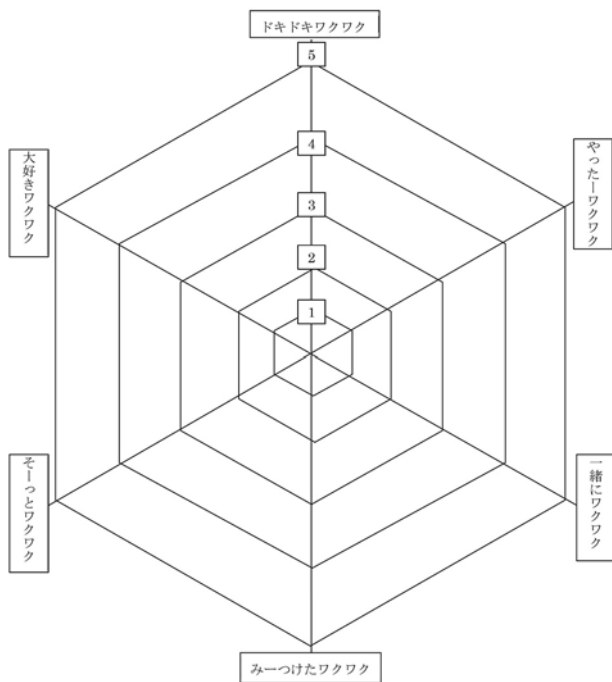


図1 ワクワクチャート

5. 平成26年度の 実践研究の経過

平成26年度に入り、4月からはこれまでの実践での取り組みを踏まえ、以下の3点について実践、検討を行った。

■園庭環境の整備

平成25年より園庭環境の改善としていくつかの取り組みを行ってきたが、より子ども達の遊びがワクワク、ドキドキできる園庭を目指して日頃の子どもの遊ぶ姿から次のような取り組みを行った。

初めに、園庭東側の倉庫を移動したスペースの遊びの充実を図った。以前は自由に摘める草花の畑を作ろうとシロツメクサを植えたスペースだったが、土壌の問題で草花を栽培することは困難であった場所である。このスペースでは子ども達が木登りや虫探し、ロープ遊びが行えるよう整備した。すると、子ども達は保育士の子測通りロープを利用して木登りに挑戦したり、虫を探すために土を掘るなど多くの子ども達が集まってきた(写真6)。

次に築山の制作である。築山の取り組みは、当初保育士は築山を作ろうとしていたのではなく、プランターでの栽培用の土をブルーシートに広げ、土作りを行っていた。しかし、その途中に子ども達はその土で虫を探したり、土いじりや登り降りをして楽しむようになった。その後、子ども達により土が固められ、築山が完成した。この築山制作は保育士の意図とは異なる子ども達の姿から偶然に完成したものであったが、子ども達にとっては今迄になかった目線になれる楽しい遊びの一つになった(写真7)。

そして最後に、園庭の西側にある非常階段下のスペースの見直しである。このスペースは、以前は砂場の遊具置き場で遊べる場所ではなかった。そこで、遊具は砂場近くに移動し、階段下を整理すると何もないトンネル状の回路になり、年齢に関係なく人気のスペースになった。幼児はトンネル内でごごを敷いてままごと遊びを行い、乳児は通り抜けたり、隠れたり、トンネル内で声の反響を楽しんでいた(写真8)。

このように、今迄の園庭環境を子どもの遊びの姿から見直しすることにより、子どもの遊びが大きく変化することを再認識し、日頃の保育実践を見直すきっかけとなった。

■遊びの提供と見直し

次は、人的環境にかかわる保育士の遊びの提供と見直しである。これまでの実践の中でも保育士は、子どもが楽しめる遊びを提供しようとロープやタイヤ、ジョイントマットを使用した遊びの展開の研修などに出向き、活動の幅を広げる取り組みを行っていた。しかし、実際に

園に戻り実践してみようとしてもスペースや遊具の数の問題により研修で学んだような遊びが提供することが難しいという課題がみられた。そのような中、再度これらの遊具に対する子ども達の遊びの姿から見えてくるものを探ってみることにした。

ある時、3歳児の子どもが木や固定遊具にロープを巻き付けたり、振り回したり、保育士としては「危ない」と思う遊びをしていた。そこで、大人の手で、安全で子どもがワクワクするロープ渡りの遊びを固定遊具の所に設定してみた。すると、子ども達が、今迄何となく巻いていたロープがこんな遊び方ができるのかと、夢中になって遊ぶ姿がみられた。その後は子ども達同士で遊びを発展させ「ここにロープを張ったらブランコになるかもしれない」、「あの枝に結んだら木の上まで登れるかもしれない」と友だちと助け合ったり、教え合いながら意欲的に取り組むようになった(写真9)。本町保育園の園庭には、大きな固定遊具や樹木が壁沿いに並んでいて、ここここにロープを繋げたら面白そうという場所が多々あり、以前は不便だと認識していた園庭環境が遊びの見直しにより利点へと変化していった。ロープ遊びはともすると危険な遊びになり、保育士としては敬遠しがちな遊びではあるが、遊び方や使用方法によっては、子どもにとって、多くのワクワクが含まれるということに気づかされた。

■遊んでいる子ども達からの検証

最後は、実際の遊んでいる子どもの姿から園庭での遊びを検証することである。これは、平成25年度に実施した1つの事例から6つのワクワクポイントを数値化し、レーダーチャートを使用し、遊びや保育士のかかわりを検証していくものである。当初は、遊んでいる子どもの姿のみからチャートを作成していたが、最終的には、子どもの遊びの姿からのチャートと保育士のかかわりによっての子どもの姿と2種類のチャートを作成し、両者の比較により検討を行った。

園内研修の中で、前述の1歳児の女兒が回遊路を発見し、独りで一周する事例をグループごとに検討していくと、同一の事例を検証しているにもかかわらず、それぞれの「ワクワクポイント」の数値が異なり、全体のチャートの形も様々に表されていたことに気づいた。また、1つの事例を皆で検討することによって、保育士同士で多様な感じ方や考え方があることが認識でき、普段の保育実践にも有益になった。今回、実践研究で多くの事例を検討することにより、日常の保育中にも保育士同士で子どもの姿に対して話をする機会が増えてきた。また、先述の回遊路の事例でもある通り、子どもに対する援助の仕方や言葉掛けのタイミングなど保育士のかかわり方

つによりチャートの形が変化するという事も、「ワクワクポイント」の数値を考察することで明らかになった。実際の保育では、「ワクワクポイント」の数値を上げていくことが目的ではないが、保育士が目の前の子どもの遊びの姿から、より子どもがワクワクするような援助とは、かかわりとは何かを考え、その上で実践に移していくことは大切なのではないか。保育士の専門性として、自分自身の子どもに対するかかわりや行為の意味づけを明確にしていくことは重要である。今回の実践研究で、子どもの姿からレーダーチャートを作成することにより、自分自身の保育実践を振り返り、どのような物的・人的環境の整備が必要かを省察することができたのは有益であった。

6. まとめと今後の課題

今回の実践研究では、「園庭環境の改善」をテーマに2年間実践での様々な取り組みを行ってきた。研究を開始した当初は、「狭い、危ない、使いにくい」というマイナスのイメージのあった園庭をどうにか魅力的な園庭に改善したいという想いで、少しでも広く、使いやすくという事で遊具や環境など外的環境の改善を行ってきた。やれること、気づいたことはやってみようという保育士の意欲から、畑や築山、トンネルの回遊路など多くの試みが実行された。それにより子ども達の遊びや活動や急激に変化したことは大きな収穫になった。

また、目の前の子どもの遊びの姿から何を楽しんでいるのか、何が面白いのかとチャートを利用して検証することで、保育士自らが人的環境としての重要性や役割を認識できたことも大きな成果であろう。しかし、保育実践においてチャートを使用して「ワクワクポイント」を数値で評価していくことに関しては、保育士の主観で評価していくので、今後は数値の根拠や客観的な指標を作成していくことが必要であると考えます。

今回の実践発表のテーマである「魅力的な園庭づくり」は、目の前の園庭で何が出来るか子どもの姿を見つめ直す事から始まり、そして環境の一部である保育士のかかわりを再度見直すことにより、子ども達にとって本当の意味での魅力的な園庭へと改善されたのではないかと思う。

最後に、本研究の実施にあたり2年間研究を共に進めていただいた中野区立本町保育園の園長先生をはじめ教職員の皆様に心より感謝申し上げたい。

引用文献

- 1) 指田利和「こども教育宝仙大学と東京都中野区との地域連携について—保育者養成・子育て支援・地域社会—」こども教育宝仙大学紀要, 3, 117-121, 2012.



写真1



写真2



写真3



写真4

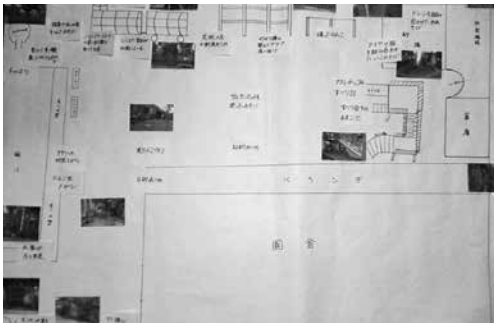


写真5



写真6



写真7



写真8



写真9